

## 印象派からその先へ ―世界に誇る吉野石膏コレクション展

三菱一号館美術館（東京・丸の内） 2019. 10. 30～2020. 01. 20



「吉野石膏コレクション」は、石膏ボードを中心とした建築資材で知られる会社で、社内の創造的環境づくりを目的に、1970年代から「日本近代絵画」、80年後半からは「フランス近代絵画」の収集を開始している。そして、91年には創業の地の「山形美術

館」に作品を寄託し、「モネ」、「ピサロ」、「ルノアール」、「シャガール」などの画家の作品を公開したため市民の大きな反響を呼んだとされている。

コレクションの内容は、その質の高さも然ることながら、優しく、親しみやすい作品が多く、世界に誇れるものと言われている。本展は“粒よりの絵画群の本格的な紹介”として、「ルノアール」「ドガ」「カサット」のパステル画は、油彩の筆触分割という側面から語られることの多い印象派の作家それぞれの技法の特徴と豊潤さについて、新たな視点をもたらしている。

ピエール＝オーギュスト・ルノアール《シュザンヌ・アダン嬢の肖像》上図  
エドガー・ドガ《踊り子たち（ピンクと緑）》1894年 パステル/紙



画伯のよほど気にいった色の組み合わせで、本番前に出番を待っている踊り子たちの情景を描いた作品である。

踊り子たちの衣装はピンクと緑色で素敵な柔らかいパステルカラーに包まれたように優しく、特にスカートの柔らかくて繊細な質感は見事なまでに描かれている絵画作品であるのは、油彩画でなくパステルで描かれた作品のためである。

クロード・モネ《サン＝ジェルマンの森の中で》1882年 油彩/カンヴァス



印象派の代表作家「モネ」は、“光のモネ”と言われるだけあって自然の中で輝く外光の美しさに強く惹かれて、その探求と表現に障害を捧げた。作品は、フランス郊外のサン＝ジェルマンにある人の姿が全く見られない森の中の様子が描かれて、自然の光の描写がとても素晴らしくて吸い込まれそうな雰囲気である。この色合いの鮮やかさが美しいのは、印象派の特徴のひとつであるとされている。